

たよりの第62号目次

雪とジャックの依り代

西松 布咏

師匠と学生たちが紡ぎ出した
恍惚の異空間

高橋 幸治

布咏さんと邦楽三昧

並木 隆史

《岐阜たより》

粋艶会・そして二つの川

西松 布咏

《会員コラム》

新刊紹介

本郷 公基

今後の公演他予定

三月廿八日(土) 午後一時より

赤坂・泉くらぶ

第三十八回 美紗の会のついで

美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

五月廿三日(土) 午後六時より

平塚・メインロフスター

ポエムな邦楽の夕べ

皐月のロフスターディナーを

味わいながら

詩朗読

ヤリタミサコ

唄と三味線

西松布咏

七月廿六日(日) 午後二時より

軽井沢・鶴間邸

第二回 薊の会

フアドと江戸の唄

フアド

香川有美

ギター

中村よしみつ

唄と三味線

西松布咏

お話し

寺田農

雪とジャックの依り代

西松 布咏

久しぶりに異国の友人に書いた手紙を投函しようと思えば、雪がひらひら舞っていた。節句に近い難あられのような雪は、灰色の空から突然に去年の思い出を届けてくれた。ちょうど一年前のあの日も冷たい春の雨が降っていた。

一昨年は屋形船で、いけばなの仲間との『名残りの桜と唄を楽しむ会』にお招き下さった古流松應会千羽理芳家元が、「こんどは武道家の方々と川越で……」と小江戸の佇まいが残る昔ながらの街々を人力車であちこち遊び、ようやく雨が上がった夕暮れ時のお座敷で私の唄を聞きながら、美味しい肴とお酒で江戸の春爛漫を楽しく酔ったひとときが鮮やかに甦った。

家元との出会いは昨年三月に亡くなられた舞の閑崎ひで女師の地方を務めていた頃の二十数年前にさかのぼる。

未曾有の大雪が降った初めてのリサイタル「秘すれば唄」には、ひげもじゃな『長靴を履いた猫』スタイルで御越し下さり、爾来どんな小さな会にも多忙の中を必ずいらして下さった。

私も家元の生花展には逸る胸をおさえて待ち焦がれたひとと邂逅するように密かにその作品に逢いにかがった。

他流の家元が美しい花々を端整に活かしているなかで、むしろそれを拒絶するように植物としての花に潜む命の根源、あるいはその美を冷徹なまでにそぎ落とした真の形にして、観るものにどんと突きつけ語りかけた。家元

からすると私は若輩者なのに、おこがましくも自分の芸に潜んでいる孤独と苦悩を共有し、底に静かに流れる情熱に私だけがそっと触れてしまったかのように、逢瀬の後には熱い息吹を身体いっぱい感じて家路に着いたものだった。

昨年十月十八日の「ニュアンスの会」にも真っ先に出席のお知らせを下さり、嬉しく当日を迎えた朝、着物に着替えている時「金沢で風邪をひいてしまつて残念ですが……」といったもの声とは程遠いかすれ声の電話が入った。その後、体調はいかがかしら……とお便りしようと思いつつ日々が過ぎていった十一月二十五日に訃報が届いた。

江戸時代から続く古流生花の九世家元でありながら精力的に自ら各地の後進の指導にあたり、忙しい合間を縫って身軽にあらゆるジャンルの方々と親しく交流し、軽妙洒落なその存在は常に周りを明るく彩っていた。又伝統の枠に鎮座できない血の気の多い若き芸術家を鼓舞するかのよう、常に斬新で切れ味の鋭い作品は伝統に前衛そのものであった。そんな不死身のスーパーマンのような理芳家元がこんなに早く天に召されてしまつとは……新しい年になっても受け入れられず、まさに昨年のニュアンスの会のテーマであった「存在の



蜻蛉明日への祈り」のように在りし日々を偲びながら過ごした。

一九九九年十一月六日に青い月夜が闇を包む白亜の西洋館・鳩山会館で「第二回ニューアンスの会・伝統は妄想なのか」にご出演下さったことを思い出す。

田中優子さんの洒落た司会でさながら中世の社交場となった絨毯のフロアに古典唄の演奏時は、月と太陽をイメージした傳花の花衣桁を『おくりびと』のような佇まいで古式ゆかしく活けて下さり、前衛創作曲の時は、即興で元藤燐子さんの「橋姫」の頭部に家元が花を活けながら、タブラと三味線と唄で舞踏するフラワーレンジメントを展開し「花を活けることは自分を活けること、宇宙を活けること」と異次元の世界を表現して下さいました。

観客の詩人・ヤリタミサコさんは「マグリットよりも不思議な官能の夜」と、白石かずこさんは「まるでひとつのシンフォニーのような夜」と口々に絶賛してくださいました。すでに亡き元藤さんも天空で白いドレスを纏い、蜻蛉となって裸足の土方巽と共に舞踏していることだろう……と夢のように過ぎたひと夜の儚さがことさら身に沁みる。

年の初めに銀座松屋での「古流協会展」のご案内をいただいたが、もう家元の作品には逢えないと放念していたところ、多くの古流家元の中に干羽理芳の名を見つけて、慌てて最終日に駆けつけた。

大きく厚い銅版のような枯葉が重なる丘の真ん中にすくっとたった一本の古木を前にし、ふと「旅に病んで夢は枯野を駆け巡る」の芭蕉の句が浮かんできた。



しかし颯爽と天空をまっすく突き刺している木は闘い終えた日本刀ではない……。家元が地唄『ゆき』の舞に魅せられ、『舞踊といけばな』に寄せた「花も雪も払えば清き袂かな……と雪の中に立ちすくむ一人の女に一作の水仙のいけばなを思った。たかだか二十センチたらずの一作なのに一間の床の間を引き締める水仙。揺らぎのなかに想いを内包する指先が余白の空間を見事に支配している舞。凛とした美しさを醸し出すその姿にいけばなと通い合う確かな芸の力を感じた」と在りし日の一文を思い出す。

又十四年前に出版された〈現代のフラワーティスト〉のページを捲り、若い頃の作品をなつかしく紐解いていると、見開きページいっぱい紺碧の天空に届けとばかりに、どこまでも伸びた細い木が私の心突き刺した。空高くまっすく指指しているたくましい肉体美の男の青銅像と並べ、「細い曝れ木に篇を絡ませて出来る限り高く斜めに伸ばした。曝れ木は枯れているので途中で折れる恐れがあったが、かすかな風に揺らぎながら、思ったよりしなやかであった。見ていると私の中で緊張感と解放感とが入りまざり、その両方が快かった。ヘジャックと豆の木と〈神の依り代〉が交錯し、その先端に雷光の煌きを見たいと思った。」の文

章に出会った。

イングランド地方の民話のシャックが、大切な生活の糧であった牝牛を五粒の豆と交換すると、たちまち時いた種が空まで続く蔓になり、それを懸命に登り巨人から豎琴と金の卵を産む鶏と金貨の袋をうばう物語と、神羅万象に心霊が依り付き、神とされる日本古来の依り代の物語の交錯が一本の木なのか……。

もしかしたら生きる為に必要な心に糧が欲しかった少年シャックに自分を重ね、江戸から累々と続く家元としての枷の狭間を一本の木にしたのかも知れない……。

いけばなも、舞も、唄も、瞬時に消えてゆく表現者の心のあらわれであり、自然界の輪廻の前では、所詮束の間しか生きられぬ人間の片思いであるかも知れない。でもいつか一本の木が永遠に空へ続いて行きその後の物語をも予感させるメッセージを残せるとしたら……。

これからも先達が残そうとした木の行方を追って私も、身をひとつ心をもひとつにして悠久の時を唄ってゆきたいと思う。

師匠と学生たちが

紡ぎ出した恍惚の異空間

高橋 幸治

本業のかたわら、母校である日本大学芸術学部文芸学科で、週一回、メ

ディア論のゼミを担当している。日芸は三年次と四年次が二年間通しのゼミとなるため、学生たちにとっては、三年生になったときのゼミ選びは教員選びは、今後の人生に影響をおよぼしかねない重大な選択となる。こちらもちからで、二年間、自分のもとに集まった学生たちといやが上にも付き合わなければならぬため、彼等との相性がそのまま、教員生活におけるモチベーションとして反映される。幸い、我がゼミの一期生である現四年生たちは、学内でも有数の個性派ぞろい、情報に対するアンテナの張り方、時代の潮流を鋭敏にキャッチする勘、本物と偽物を峻別するシビアな嗅覚、すべてにおいて優れた希有なメンバー構成となった。普段の仕事の合間を縫って、毎週三年生と四年生ニコマぶんの授業の準備をするというのは正直しんどいものだが、彼等の熱意が、ともすると萎えそうな気持ちを常に鼓舞してくれた。まさに「教える側」と「教わる側」という立場を超えた、共同作業のような二年間であった。

そんな彼らも三月で卒業である。二月十一日(木)の四年生の最終講義、不躰とは思いつつも師匠に特別講師をお願いし、快諾していただいた。学生たちへの二年間の感謝の気持ちから、是非、師匠の唄と三味線を聴かせてやりたいと思いついたのだが、同時に、彼等なら絶対に何かをつかみ取れるはずだという確信があった。

会場となったのは、この日のために学生たちが学科事務室に掛け合って確

保したやや広めの教室。部屋にはやはり学生たちが特別にしつらえた舞台が設置されている。

師匠を要として椅子を扇型に並べ、照明を普段よりもかなり落とし、午後四時二十分、いよいよ最終授業の開始となった。

師匠のこれまでの歩みを簡単に紹介させていただいたあと、まずは「夕暮れ」歳の瀬「止めても帰る」と、比較的短かめの楽曲を演奏していただく。続いて私の対話形式で、「問」からこそ何かが生まれるということ、再現できない一回性の中にこそ美しさが潜むということなどをお話していただいた。

そして、四曲目は「櫓のおせ」。気が付くと窓の外はすっかり日が落ちており、授業開始時はまさに「夕暮れ」だった教室が、いつのまにか宵闇の中に溶け込んでいる。ふと、教室の空気が次第に変容し始めていることに気が付いた。そこには、学生たちが師匠に向けて投げかけたバイブレーションと、師匠が学生たちに向けて投げかけたバイブレーションが、見事に共鳴している瞬間があった。一回限りの特別な時間……。再現不能な特別な空間……。自分も含めて、学生たちも、まるでここがどこなのかわからないような不思議な感覚に支配されていた。五曲目の「アユタヤの蜻蛉」では、師匠の演奏中、外をたまたま一台のバイクが通った。脳裏にはタイの地元青年が駆けるバイクのイメージが浮かぶ。もはやそうしたハプニングでさえも、用意された演出であるかのような効果となってしまっていた。最後の演目「黒髪」を唄い終え

た師匠が、「今日はとってもいい気分であれど、演奏ができた」とおっしゃってくださったときは、本当にうれしかった。同時に、師匠にそう言わしめた学生たちはさすがである。二年間、自分を叱咤激励してくれたように、彼等はあの日、師匠から何かを引き出してしまったのだろう。

今回師匠のお力をお借りして、自分が学生たちに最後に教えてやれたこと。それは、絶対と言語化、数値化、法則化できない、得体の知れぬ何かが、人の心をつかみ、魂を揺さぶるのだということだった。その場に漂う空気や温度、とらえどころのない気分のようなものを、ある形式を通じて表現・伝達する……。師匠というメディアを介して、学生たちはそのことをしっかりと感じ取ったはずだ。



布咏さんと邦楽三昧

並木 隆史

鳶くらはびは、日本の伝統文化・芸能をより身近に、より気楽に楽しむ事を目的

とし、飲みながら食べながら古典芸能を楽しむトーク&ライブがワークショップを月次で開催しております。お蔭様で昨年、満十年となりました。活動の切っ掛けは、仕事で四十歳から八年間ロンドンに赴任していた時、『日本人なのに日本の伝統文化・歴史をほとんど知らない』ことが英国人との交流に影を落していることに気づいたことにあります。海外で仕事をするには英語などの言語習得もさることながら、先ず自国の伝統文化・歴史の再認識が必要との反省から、日本に戻った四十八歳から日本の伝統文化・歴史を紐解き始めました。好きで始めたことではないので挫折防止策として仲間を募り、『鳶くらはび』を立ち上げ、古典芸能に親しまざるを得ない状況を作りました。当初は三年くらいで大体分るだろうと思っていたのですが、知れば知るほどその多様さと奥深さに戸惑いつつも興味が湧き出し、尽きせぬ魅力の虜になりました。

月次の企画を立てる必要もあり、常に素敵な芸人さんとのご縁を求めています。布咏さんのお名前は、前々から家内の古い友人である川邊紀恵さん（美紗の会）からお聞きして、気にはしていたのですが、演奏をお聴かせぬままです。たまたま松岡正剛さんの主宰する連塾で演奏を直に耳にしてからは布咏さんの芸に魅せられ、一度是非出演いただくと思いい立ち、一昨年やっと実現いたしました。地唄、歌澤、小唄、

長唄など幅広くこなす布咏さんです。『邦楽三昧』と銘打ち、邦楽の唄いものを纏めてお願いいたしました。常磐津、新内、一中節などの浄瑠璃（語りもの）は数多く会でご紹介しております。ですが唄いものは未だでしたし、様々なジャンルの語りものや唄いものがある中、どれがどう違うのかということすら解らなくなっている我々です。これら唄いものが一度に聴けるということ、前評判の高い会となりました。布咏さんの美しく張りのある声と艶やかな系の音に感激しました。その声も多く、十周年記念事業年である今年の幕開けとして旧正月三日（一月二十八日）、『邦楽三昧』の二回目をお願いし、新年を寿いでいただきました。時代の流れを汲み取りつつ、伝えられてきた古典芸能には、エンタテインメント性だけでなく、歴史の勉強ではなく、読み取りにくいその時代の人間の感情、生き方、感性、さらには培ってきた人間の知恵を知る手がかりが詰まっています。ずっと私が気になっていることのひとつに「さわり」があります。有吉佐和子の小説「一の糸」の世界です。この言葉の語源がペルシヤ語で、「響く」という意味だと文楽の豊竹咲甫大夫さんに教えていただきました。一中節の都一中さんは「三味線の超絶技法は一の糸の一撥です」とも。ピアノなどの超絶技法はよくあんなに指が動くものだと感心して拍手が起きますが、それはその音に心が響いたからではなくて目で見た早業（解りやすい）に対してです。かつて胡弓の楊

興新(ヤンシンシン)の演奏会で彼がゆつくり弦を一弾きするたびに訳解らず涙がこぼれた覚えがあります。一の糸に二の糸や三の糸が共振・共鳴した繊細な音の味わいは広いホールではなくて、演奏者の息遣いすら感じられるお座敷が一番です。ノイズのような「さわり」を音楽として確立させてきたのにはどういいう経緯があったのでしょうか?興味が尽きません。

歌人・馬場あき子さんの解釈による世阿弥の「風姿花伝」を読むと『花は心、種は態(わざ、演技・技術)なるべし、身につけた芸の数々を生かして「花」と咲かせるのは「心」ひとつの工夫にある。』とあります。布咏さんがこれからどんな「時分の花」を咲かせていかれるのかがとても楽しみです。

《岐阜たより》

粋艶会・そして二つの川

西松 布咏

〈面白うてやがて哀しき鵜飼かな〉
芭蕉の句で知られる岐阜の長良川には青葉が香る五月になると、半年あまりの長きにわたる屋形船が行き来し始め、静かな流れに人が集ってくる。

その岐阜へ出稽古に行くようになって早や三年になる。

最初は不安で、粋を極め艶な喉を持つ殿方とどのように接し、稽古をしたらよいのか困惑したが、四季の移ろいの中で

朝夕変わらぬ水面をたたえる長良川のゆつたりとした流れと共に、いつしかその不安は消えていった。

信長が天下統一を夢見た岐阜城を抱く金華山のふもとに位置する落ち着いた風情を残す今町。その一角に佇む料亭「かわらや」の部屋での三味線を弾くひとときが、かけがえのない時間となってきた。

稽古に疲れた合間のひと時には、すぐ隣に芭蕉が長期滞在した妙照寺や齊藤道三から三代に渡る菩提寺である常在寺。少し足を伸ばせば信長の居館跡や像のある岐阜公園、和紙に金箔を施した日本最大

の岐阜大仏が安置されている正法寺：一口では語りつくせぬ歴史が散在する各所を散策するゆとりも出てきた。もうしばらくすると川のほとりに咲き誇る桜並木が空を染め、そして夏には涼風を誘う空いっぱい華開く花火。東京では感じられぬ四季折々の景色に染まりながら豊かな自然のぬくもりを爪弾き、岐阜の心意気を大切に唄い続けようとの粋艶会のお弟子さんと共に、日本に生まれた幸せを味わいながら、穏やかな時間を大切に稽古に励んでゆきたいと思う。

そして「夕暮れに眺め見渡す墨田川：」と江戸時代から唄い継がれている川に添って発展してきた江戸。今や喧騒の渦にある大都会・東京には四十年連続している美紗の会。個性溢れる感性と好奇心を失うことなく、三味線唄が日本人の心に息づいていた良き時代に近づくと大切さを、いかにお弟子さん方に感じてもらえるか、日々暗中模索しながら稽古を続けてきた。

そして今…近づいてきた【三十七回

美紗の会のつどい」を目指して共に精進の今日この頃である。

来年の桜時には岐阜市民ホールでの演奏会の話も浮上している。

東西を流れる二つの川がやがてひとつになり、三味線の音がにぎやかに響きあう日も近いようだ。

《会員コラム》

新刊紹介

本郷 公基

鎌倉市の西南部にある我が家の二階の窓から、緑豊かな丘陵が見え、その先に江の島が望まれる。周囲の住民は、この丘陵を「広町の森」と呼んでいる。この森は「半夏生」や「ほとけどじょう」そして夏の夜は「ホタル」などが見られる都市近郊には珍しい自然生態系の豊かな森である。

一九七〇年代初頭、この森に宅地開発計画が持ち上がった。そこでこの森を取り巻く周辺の自治会・町内会が「鎌倉の自然を守る連合会」を結成し、二五年にわたる保全運動を経て、二〇〇二年鎌倉市の決断により、市が買い取り「都市林」として保全が決定した。

私はこの運動の最後の一年間、自治会長として関与したにすぎないが、緑保全のための市民運動としては稀有の成功例として、せむ後世に伝えたいと思い、運動史編纂委員に自ら

望んで参加した。編纂作業は、喧々譁々の議論もあり四年の歳月を要した。

昨年末運動史が完成して、本の贈呈・配布・販売に全精力を費やした。

私はこの本の編纂に携わってみて、二十五年に及ぶ市民運動「がこの種の緑保全運動としては、他に例を見ない素晴らしいナショナル・トラスト運動であり、運動の仲間の一人がいみじくも言ったように「ノーベル賞級の運動」だと思ふようになった。

この本は、出版業界不振の中、この市民運動に感動し、商業出版を引き受けてくれた「港の人」社の心意気というイターの手腕で、物語風に読みやすく書きなおされているので、環境問題に関心のある方のみならず、できるだけ多くの人に読んでほしいと考えている。美紗の会でも既に何人かの方に購読いただき心から感謝申し上げます。(本はA五版三二二頁、税込二七三〇円。購読希望者は本郷まで)

■たより第62号

発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子

■美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三二二

白金台三二二

電話 (三四四一)二七二六

(五四四七)二四二二

<http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/>